

漢字教育にみる日本語

―「常用漢字表」の行方―

萩原 義雄

はじめに

先日、産経新聞の「産経抄」に、このような記事が掲載された。

ローマ字の日本語化

戦後間もないころ、日本を占領していた連合国軍総司令部の中に日本語をローマ字化しようという動きがあった。日本語の核である漢字は習得に時間がかかる。そのため戦前の日本国民の教育程度は低く、民主化できなかつたからという理由だった。

▼全くむちゃくちゃな論理である。だが日本人の中にも「戦争に負けたのは文字のせいだ」「子供たちの将来のためにはローマ字の方が良い」と考える教育関係者がいた。「自主的」にローマ字で国語や算数を教える授業も行われ、ローマ字化は急速に進んでいった。

▼ところが、思わぬことから、この動きは一気にしぼんでしまう。当時の文部省教育研修所が全国の二万人余りを対象に、**日本語の読み書き能力調査**を行ったところ、過半数が九割以上の正解率となった。これでローマ字化する当初の理由は否定されたのである。

▼もしあの時、ローマ字化が完全実施されていたらと思うとゾツとする。今、社会の中枢にいる人たちのほとんどは漢字も平仮名も使えない。古典はもとより、漱石や鴎外らの近代文学すら「原典」で読めるのは、特別に

「日本語」を学んだ人だけになつてははずだからだ。

▼やや旧聞となるが、文科省が行った高校三年生の「学力テスト」で、古典の成績が悪化していた。大学入試で出題される割合が減り、学ぶ機会も少ない。パソコンなどの普及で文学など読まなくなつたからかもしれないが、これはローマ字化の「イフ」以上に気になる。

▼このままでは、古典文学にこめられた日本の「美」だけでなく、「日本書紀」などから読む古代史の世界も遠いものとなる。能や歌舞伎も理解できる人は少なくなるに違いない。そんな日本文化の危機がヒシヒシ感じられるのだ。(2007/04/21 06:40)

※関連する文章

藤原正彦著『祖国と国語』(平成十八年(二〇〇六)一月、新潮文庫783²刊)に「国語教育絶対論」(二)国語はすべての知的活動の基礎である―日本人にとつて、語彙を身につけるには、何はともあれ漢字の形と使い方を**身につける**ことである。日本語の語彙の半分以上は漢字である。これには小学校の頃がもつとも適している。記憶力が最高で、退屈な暗記に対する批判力が育っていないこの時期を逃さず、叩き込まなくてはならない。強制でいこうに構わない。漢字の力が低いと、読書に難渋することになる。自然に本から遠のくことになる。(略)国語の基礎は、文法ではなく漢字である」(17頁)(三)国語は論理的思考を育てる―(四)国語は情緒を培う―高次の情緒、情緒を養ううえで、小中学生の頃までの読書がいかに大切かということである。

これらの情緒は、頼りない論理を補完したり、学問をするうえで重要というばかりでない。これにより人間としてのスケールが大きくなる。苦境を打開するため、日本人一人一人が自然への繊細な感受性、自然への畏怖、ものあわれ、なつかしき、などといった情緒を身につけ、論理や合理の他にも大切なものがある、ということの世界に発信し教えていくことが求められる。これこそが日本人が今後果たしうる、最大の国際貢献と思う。成否は国語にかかっている。(五)祖国とは国語である―フランスのシオランという人の言葉らしい。祖国とは国語で

ある。ユダヤ民族は二千年以上も流浪しながら、ヘブライ語を失わなかったから、二十世紀になって、再び建国することができた。(略)ユダヤ人の国語に対する覚悟に圧倒される。それに比べ、言語を奪われた民族の運命は、琉球やアイヌをみれば明らかである。祖国とは国語であるのは、国語の中に祖国を祖国たらしめる文化、伝統、情緒などの大部分が包含されているからである。(30頁)(六)これからの国語—国語力の低下は、(二)で述べた知的活動能力の低下、(三)で述べた論理的思考力の低下、(四)で述べた情緒の低下、(五)で述べた祖国愛の低下、を同時に引き起こしている。(略)この四つの低下は確実に国を滅ぼす。国語の力の低下が国を滅ぼすのである。改めて祖国とは国語なのである。(略)寺子屋には「読む」「書く」しかなかったが当然である。本質を見抜いていたと言える。

古典が減らされたばかりでなく漢字も減った。一九四六年、GHQの指導により、漢字を全廃し、仮名に移るまでの移行措置として、一八五〇字からなる当用漢字が導入された。GHQは、漢字が難しすぎるとかタイプライターにのらない、などの取るに足らない理由をつけたが、真の理由はもちろん、「日本が二度と立ち上がってアメリカに歯向かうことのないようにする」という大方針のため、文化の中核を破壊してしまおうとしたのである。その後、一九八一年に常用漢字となったが、漢字数は五%しか増えなかった。このおかげで新聞などは、ら致、破たん、残がい、などと書くようになった。漢字文化圏にある我が国の豊富な言語文化を、自らの手で毀損したのである。……。(42頁)

漢字言語改革の歴史

実際、本邦における言語政策の歴史を瞻望してみるに、江戸時代後期頃から漢字批判が躍動化をはじめている。

○賀茂真淵『國意考』明和二年(一七六五)、表音の假名文字を提唱○本居宣長『玉勝間』文化九年(一八一二)、漢字使用の批判

続いて、時代は明治文明開化の時代を迎えると富国強兵を核に、文欧化政策が推進されていく。日清戦争はこの頂点へと押し上げられていく。国語の文字政策も漢字撤廃論者と慎重派の人のなかで揺れ動きだす。

○前島密『漢字御廃止之儀』慶應二年(一八六六)漢字習得非効率。○福沢諭吉『文字之教』明治六年(一八七三)

○西周『明六雑誌』明治七年三月に、「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」

○南部義籌 羅馬字を推進 明治十二年

○末松謙澄『日本文章論』明治十九年 表音綴りにし、片假名を左横書きにして一語一語の判読を高める字形考案を主張。

○馬場辰猪『日本語文典』明治二十一年、英語国語化反対

○文部省 國語調査委員會の設置 明治三十五年

「文字ハ音韻文字ヲ採用スルコト、シ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト」他三項目を決議。

○上田万年『國語國字の改革制限』「言文一致の推進」「標準語の普及」「臨時國語調査會(会長職)」「常用漢字表」(一九六二字)発表。「假名遣改訂案」大正十二年に発表。

○山田孝雄「文部省の假名遣改訂案を論ず」を発表。

○芥川龍之介、藤村作、美濃部達吉、松尾捨次郎、高田保馬、本間久雄、木下杢太郎等が改訂反対論を展開

○与謝野鐵幹、与謝野晶子夫妻 雑誌「明星」大正十四年、反対運動

○上田万年・保科孝一らによる「國語簡易化」

○國語改革團體「國語協會」昭和五年に設立。

○山本有三「國語に對する一つの意見」昭和十三年、振假名廃止、漢字制限を提唱。

○文部省國語課を新設。國語變革運動を推進。昭和十五年。
○「日本國語會」昭和十七年に設立し、國語改變案に反対。理事長松尾捨次郎。發起人に、市河三喜、伊藤整、岩淵悦太郎、小汀利得、折口信夫等。

○文部省「標準漢字表」(二六六九字)昭和十七年を發表。

《終戦後》

○連合國最高司令官總司令部による第一次アメリカ教育使節団が報告書を提出し、学校教育における漢字の弊害とローマ字の利便さを指摘。

○志賀直哉 雑誌「改造」一九四六年四月、「國語問題」を發表。

○読売報知新聞社説「漢字廃止せよ」一九四六年十一月十二日を掲載。

◎「当用漢字表」昭和二十一年(一九四六)内閣告示の一八五〇字

文字の簡易化による新表記文字の提示

○新表記反対者：美濃部達吉、阿部次郎、津田左右吉、今泉忠義、小島政二郎、里見淳、辰野隆、亀井勝一郎、福田恆存、高橋義孝、林房雄等 國語審議會は黙示。

○國語審議會は適用当用漢字を昭和三二年(一九五六)七月五日に發表。「遺跡・遺蹟」「英知・叡智」「激高・激昂」「更正・甦生」「混交・混淆」「扇動・煽動」「智恵・智慧」「注文・注文」「防御・防禦」「略奪・掠奪」等。

※「意向・意嚮」「格闘・格闘」「奇形・畸形」「講和・媾和」「骨格・骨格」「參勤・參勤」「書簡・書翰」「破棄・破毀」「妨害・妨碍、妨礙」などは文字そのものを置き換えて用いた。

◎当用漢字別表「教育漢字」(八八一字)

◎人名用漢字別表

◎現代仮名遣い

◎「常用漢字表」一九八一年に内閣告示の一九四五字

☆日本規格協会(JIS)電子文字のコード化「JIS漢字コード表」

第一水準漢字表

第二水準漢字表

補訂漢字表

☆「今昔文字鏡」(紀伊國屋書店)八万字↓一〇万字↓十五万字へ

☆「新撰漢字総覧」(小学館)

☆「超漢字」(トロン)

常用漢字の行方

漢字の未來を占うとき、視覚認識の高い漢字文字は、

テレビジョン放送のなかでテロップ化文字でも漢字は大いに活用されている。たとえば、ボードによる要項揭示法に、

- ① 病気になるらない
 - ② ……
 - ③ 情報提供
 - ④ ツツジ「花の名」。↓【躑躅】次々に咲くところから
- テロップ文字

⑤ 亡き父最愛の家族と五輪の道(水泳自由形佐藤久佳選手)

⑥ 始良町(鹿児島)ルビ表示した例

といった具合に漢字の文字は活かされている。一般の広告文やポスターなどがローマ字表記やカタカナ表記で掲載する媒体物が増加していくなかにあつて、**老舗の茶店や酒店などの木製店舗看板には、今も漢字が見事に息づいてる**ことを街を散策しているときにあちこちで目にするのである。それは、都会の繁華街より下町商店街

に、大都会東京より、各地方に多く見受けられるのも特徴点の一つと云えよう。そこで、貴方が見付けた看板文字を是非携帯デジタル写真に撮影して送信いただけるかと有難い。

★送信先

MyBBS(hagi@8930) = <http://8930.teacup.com/hagi/bbs?from=bbssticker>

手書き文字そして漢字

ノート作成には、やはり手書き文字。この時にどの程度の漢字をもつて表現することが出来るかであろう。随かに「はなぢ」や「はなし」といった、かな表記をすると迷いを生じることなどは、漢字で「鼻血」や「花地」と表記すると迷いが見えなくなるから不思議である。「痔」「鯨」などの語は、迷いの王様とも云える文字かもしれない。現代仮名遣いでは、すべて「じ」「ず」の表記を用いる。但し、苗字ではどうだろう……。漫画家「手塚治虫」は、初期の作品には「てずかおさむ」とし、ある時から「てづかおさむ」に補正した。「うなずく【領】」「つまずく【躰】」はその表記の字例と云えよう。

昨日民放番組を夕方何気なく見ていたら、「まんじゅう」をテロップで「満ちう」と表記していた。そこで、追っかけ調査を試みると、神奈川県、江の島電鉄長谷駅下車、徒歩三分のところに「菓子処 恵比寿屋」があり、ここには「大佛観音煎餅」と並んで「黒あん女夫満ちう」という商標文字が用いられている。さらに、杜の都仙臺に「天満屋」という店があり、この店の「まんじゅう」の名前に「愛ご満ぢゅう」という商品があつて、此の由来が添えられているから紹介しておこう。「仙台の方言として、愛しい、小さい、可愛い、ことを「愛ごい(めごい)、愛んこい(めんこい)」と言います。また、仙台藩祖伊達政宗公の御正室は、愛姫(めぐひめ)様と言われます。仙台ゆかりの和菓子として御賞味下さい」としている。通常「まんじゅう」は、漢字表記して「饅頭」とするのだが、古くは「まんぢう」として書かれてきたのである。これが「まんぢゅう」とも表記されている由縁のようだ。

《コラム》落語「饅頭怖い」の歴史

中国は明の時代の『五雜俎』と云う書物に、「貧乏な書生が饅頭が恐いと云つて饅頭屋の主人のいたずら掻き立てて饅頭をせしめる」と云つた原譚がある。これが日本國に伝来し、「氣のくすり」(一七七九年刊)詞葉の花』(一七七七年)などに改編され、日本版「饅頭恐い」が成立した。大坂で練り上げられた譚を明治に蝶花楼馬楽が東京に持ち込んだ。そして落ちの「濃いお茶が一杯恐い」と云うのが当時の粋人の間に瞬く流行したという。

また、手書き文字故に変容する漢字表記に、「駐車場」がある。「駐」は本来馬扁なのだが、これを車扁「𨇗」を用いたりしている。すなわち、「𨇗車場」と標示する現実主義の文字表記がある。

「月極駐車場」現在「満車」が通常の標記字である。さて、北海道旭川市に行くと、「月決駐車場」の文字に出くわす。なぜだろうか？ある人の考えは「極」の文字は「きわみ」、そして「極道」「極樂」の「ゴク」と読むのだがなぜかしよばいへ！一九九八年の若者言葉のだそうだ。

